

# 姜沆の「瘤戒」と藤原惺窩

―朝鮮の儒者に伝わった日本の「こぶとり」

邊 恩 田

## 一．睡隱 姜沆と藤原惺窩

### (1) 睡隱 姜沆

姜沆カンハク（一五六七―一六一八）は、朝鮮王朝の士大夫、儒者である。日本にもよく知られる朝鮮朱子学の大家、退溪イフヤン李滉の学統に連なる。睡隱スウインはその号。碩儒姜希孟の五世孫である。

文祿元年（一九五二）豊臣秀吉による朝鮮侵略が始まり、さらに慶長二年（一五九七）一月、再度の侵攻が始まった時、刑曹佐郎の任にあった姜沆は、九月二十三日、全羅道靈光の沖合で、藤堂高虎の軍勢に一家ともども捕らわれてしまう。

この時、幼い息子と娘が賊によって目の前で海に投げ捨てられ、それを慟哭する妻も賊に殴打され死んでしまうという惨害を受ける。押送される途次に、長兄と次兄の子らも病死する。

押送されるあいだに、姜沆はいく度も脱出逃亡を図るが果たすことができず、対馬島から壱岐島、伊予大洲を経て、慶長三

年（一五九八）六月大坂に、そして京へと移送され、ついに伏見の藤堂高虎の屋敷に軟禁されることになる。

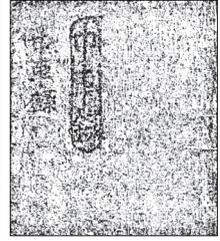
一家一族の死と離散という惨害の中にあっても、朝鮮国王の「臣」であり「儒者」である姜沆は、自らを守るべき節義を強く保持していたことは、「賊中封疏」（国王への上奏文。『看羊録』（原題「巾車録」）所収）に、次のように表出されている。<sup>①</sup>

・職を奉じながら何のなすところもないまま、上は朝廷を辱しめることになり、罪は逃れようもありません。

・（頭の）頂いただきから爪先に至るまで、尽く王様の大きいなる恩恵によるものでありますものを、何一つとして〔国家に〕尽くすことなく……上は忠を建て節を立てて家国に尽くすことができません、……

・私の陋劣ろうれつさは、古人の万分（の一）の下にあります、忠を願う志は古人に少しも譲りません

このような悲痛と屈辱の抑留にあった姜沆を、藤原惺窩が尋ねてきて二人は出会うこととなる。そうして儒学を通して親交を深



『巾車録』



藤原惺窩



姜沆

めていくことになるのであった。

姜沆は、藤原惺窩について、「賊中間見録」(「看羊録」(原題「巾車録」)所収)のなかで、

又、妙寿院の舜首座なるものあり、京極黄門定家の子孫にして但馬守赤松左兵衛広通の師なり。頗る聡明にして古文を解し、書に於て通ぜざる所なし。性亦た剛峭にして倭に於て容るる所なし<sup>(2)</sup>

と、その聡明さを記し、また「惺齋記」では、

予の日東に落ちしよりして三年、斂夫(惺窩)を日本の王京に得たり。是と遊ぶこと数月、始めてその人となりを知りて、その為学を聞き、既にその為学を聞き、益々その人となりを信す。(後略)

と述懐し、惺窩との出会いと人物について評価し記し置いている。阿部吉雄氏は、惺窩は儒教的な正義感の強い人であり、姜沆はその人物学識を知ることになります。最終に「朝鮮国三百年以来、此の如き人あるは吾未だ之を聞かざるなり。」(行

状)とまで嘆じたともされる。<sup>(4)</sup>

兩人が、儒学上、学問上にとどまらず、人間的な信頼の篤い親交にあったことが知られるのである。

## (2) 藤原惺窩

藤原惺窩(一五六―一六一九)、名は肅、字は斂夫、<sup>(5)</sup>「惺窩」は号である。柴立子とも号した。永祿四年(一五六二)、播磨国細川邑の生まれ。「中世の藤原定家をうけつぐ歌学の名門冷泉家の後裔」である。

藤原惺窩は、近世日本の朱子学の祖、最初の儒者と、高く評される人物である。幼少時に仏門に入ったが、十八歳の時、父と兄が別所長治の襲撃により亡くなったため、相国寺の禅僧であった叔父寿泉をたよって上洛し、相国寺の妙寿院に止住することになり、禅の修行に励み、また儒学の研究も志したという。ところで、僧侶である惺窩が、朝鮮の儒者と接し、儒教について何らかの刺激や影響を受けたのは、天正十八年(一五九〇)来日した朝鮮国使、黄允吉、金誠一、許箴に大徳寺で会ったのが、最初のようなのである。

この時、とりわけ書状官の許箴(ホ・ソン)と親しく筆談し詩の唱和を交えており、その交流のなかで「柴立子説」なる一文を彼から贈られたが、この一文は、惺窩に「深い自省を与え：惺窩に対して極めて深い影響を与えたようである。」<sup>(6)</sup>という評がなされている。

林羅山が記した「惺窩先生行状」に、惺窩は「聖賢の性理の書を読み、当世に善師なきを思ひて」とあるように、惺窩は儒学を求め中国に行くことを決意し、ついに慶長元年（一五九六）冬、薩摩山川津から出帆したものの、遭難し渡明を果たすことができなかった。

しかし、翌年京に戻った惺窩は、慶長三年（一五九八）の秋に、伏見で姜沆に出会うことになり、このようにしてその後、「兩人はたがい尊敬し肝胆あい照らす交わりをつづけた」のであった。惺窩は、姜沆に、「四書五経」の浄書を依頼した。そして惺窩は、それらに、朱子による新注に依って、訓点を施したのであったが、「常にその姜沆の傍にいて朱子学の思想を本格的に学ぶようになり」、さらに、日本にはいまだなかったその新注による経書の出版を図った。これらは、惺窩のよき理解者である親友、赤松広道（播州竜野城の城主）の援助によるものであった。

惺窩の著作には、『寸鉄論』『大学要略（逐鹿評）』『文章達徳綱領』等があり、彼が成し遂げたこれらの業績・貢献によって、日本朱子学の開祖と評価されているのである。

惺窩と赤松広道は、のちに姜沆が帰国する際にも援助を惜しまず、無事に姜沆が帰国できるように助けている。

さて、このような姜沆と藤原惺窩との、儒学上ではなく、口承文学の資料として注目されるのが「瘤戒」である。姜沆が帰国後に記した「瘤戒」という一文について、以下くわしく見ていくことにする。

### (3) 「看羊録」という書名についての誤解

姜沆の著書の中で、日本によく知られているのは「看羊録」（原題「巾車録」）であろう。しかしこの書名については、誤解が多いようである。<sup>(9)</sup>

姜沆自身が生前この書につけた原題は「巾車録」であって、「看羊録」ではない。この「巾車」とは何か、その意味について、高弟の尹舜莘（ユン・スンゴ）は、一六五六年に板行した文集『睡隠集』の「跋」文のなかで、

巾車というものは、本来罪人が乗るものであって、先生がとくに取りあげて名づけられたのはどういう理由からであろうか。思うに、先生が謙遜・卑下されて（御自身を）罪人のごとく処せられたのである。<sup>(10)</sup>

と説いている。

すなわち姜沆は、国を侵略した倭軍に捕えられたことは、国王に事える臣として恥辱であり、罪人が乗せられる手押し車「巾車」に乗るべき者と自らを処し、それによって「巾車録」と名付けたものであった。

姜沆の没後に、高弟ら門人が師の文集を編輯するにあたり、中国漢代の蘇武が、匈奴に捕らわれ北海の地で羊を看させられた境遇にあっても王への節を守りついに帰国したという故事と、姜沆の漢詩に蘇武故事の一節があることよって、「看羊録」と題することになったという経緯があった。つまり、のちの世に行われた

改題ということになるが、著者の意志を尊重して、「巾車録」の名を残し、共に紹介されるのが望ましいと筆者は思うところである。

#### (4) 先行研究

韓国において、この「瘤戒」の資料を最初に紹介したのは、鄭炳憲／イ・ジョン／チェ・ウォノ編の『わが古典文選』（シムジ、一九九四年）である。「瘤を取ろうとして瘤をつけられた人」姜沆<sup>①</sup>と題し、原漢文を現代韓国語に訳し、簡略な解説を付し紹介している。

日本においては、はやくに松田甲の詳細な紹介<sup>①</sup>、また朝鮮文学研究の大家阿部吉雄の簡略ではあるが紹介があった<sup>②</sup>。近年琴榮辰は、笑話として取りあげ、読み下し文を示し、惺窩が姜沆に「咄」したのは「中国の瘤取り譚」だとするが、その根拠・資料の提示がない。

## 二．睡隱姜沆が伝えた「瘤戒」

「瘤戒」の原文と、筆者による日本語訳を次に挙げる。

### 瘤戒

呂宋。東海中小國也。地偏而水又湍駛。故人多癭瘤。

某甲額生瘤。幾如甕盎。抑首不能起。其妻子羞而逐之。寢息山間者數日。夜半。山鬼擊鼓羣譚。自遠而近。甲不勝其怖。應

節起舞。示若無懼者然。山鬼吐舌相顧曰。異哉。不意空山中。有此良朋之可與娛者。因擊鼓不已。甲亦舞不已。天欲明。鬼謂甲曰。我鬼非人。日出不可出。來夜當復來。公亦能復來耶。甲曰諾。鬼三問甲三諾。鬼猶不信曰。人情難保。請取公瘤以為質。遂括取瘤去。甲喜幸走倒。至家則全人矣。妻子改觀。

隣里聳傳。某乙額又有瘤。幾如某甲之大。聞甲之失瘤。盤跚往問之。甲悉告之故。喜甚。直造甲所寢息地而胥之。夜半。山鬼擊鼓譚叫而至。乙豫起亂舞。一如某甲之為。山鬼至。喜曰。有信哉。相與盡懼而罷。遂謂乙曰。恐公失信。故取瘤為信。公既能來。可還公瘤。遂取甲瘤安之乙額而去。對峙如雙家。乙大慟曰。一瘤之不堪。而況兩瘤耶。遂自經於溝瀆死。

日東僧舜首座。為余諒是事。余以俘虜生還。見棄於昭世。余又與世相忘。久而不知身之曾忝一命也。所親或勸之曰。君之絕意於榮進。譬如黃門之絕意於房室。盡且求之。以酒廢棄之。恥乎。余應之曰。籍令求之。誰即與之。前恥之末酒而窃恐更得後恥。此與某乙欲去一瘤而更得雙瘤何異。勸者太息而去。

〔注記・『羣韓國文集叢刊第七十三輯睡隱集』ソウル・民族文化推進會・一九九一による。卷三の「雜著」に収まる。原漢文に三方所行替えを施した。漢字は原文のまま。但し通行の「瘤」の漢字を用いた〕

### 瘤の戒め

呂宋は東海の中の小さな国である。土地が偏っていて水がまた速いので、瘤のある人が多い。

某<sup>なにがし</sup> 甲は、額にまるで大きい甕<sup>かめ</sup>のような瘤ができて、それを首を抑え起きあがることができな。妻と子は、恥ずかしくて彼を追いだした。

山のなかで寝てすこすこと数日、真夜中に、山鬼が鼓を撃ち群れをなし騒ぎたてながら、遠くから近づいてきた。甲は、その怖ろしさにたえられず、節<sup>かし</sup>に合せて起きあがって舞を舞い、怖くなどないかのように示した。山鬼は舌を吐き、互いに顔を見合わせながら言うには、「おかしなことだ！ 誰もいない山の中に、思いもよらず一緒に楽しむことのできるこんな良い朋がいるとは！」と。そうして鼓を打ち続けてやめることもせず、甲もまた舞を舞い続けた。空が明けようとすると、鬼は甲に「我は鬼であり、人間ではない。日が出てくれれば留まることができな。明日の夜にもちろんまた来るが、公もまた来る事ができるか。」と言った。甲は、わかつたと言った。鬼は三度問いい、甲は三度承諾した。鬼は、なおも信じないで、「人間の情は保つのが難しい。公の瘤を取って、質にしよう。」と言って、とうとう瘤をひねり取って、去っていった。甲は喜び、うれしくて、走り倒れしながら家に至ると、まさにまっとうな人であつた。妻と子は、甲を見なおした。

隣里は、耳をそば立て（このことを）伝えた。某乙の額にもまた瘤があつた。甲の大きさほどの瘤である。甲が瘤をなくしたというのを聞いて、あたふたと尋ねて行って、そのことを問うた。甲はそのわけをすべて告げたので、たいへん喜んで、

すぐさま甲が寝てすこした所に行き、そこで待つのであつた。

真夜中になると、はたして山鬼が、鼓を撃ち騒ぎたて叫びながらやつて来た。乙はあらかじめ起きあがって乱舞した。ただただ甲がしたようにである。山鬼はやつて来て、喜びながら「信があるなあ！」と言ひ、いっしょに娯<sup>たの</sup>しみを尽くして終えた。そうして乙に言うには、「公が信を失うことを恐れ、それゆえ「瘤」を取って「信」としたのである。公はこうして来たので、瘤は公に返すべきである。」と言つた。そうして甲の瘤を手にとり、それを乙の額に押さえくつつけて、去っていった。まるで二つの家が対峙するようであつた。乙は、はげしく嘆き悲しんで、「一つの瘤でも堪えられないのに、まして二つの瘤とは！」と言つた。そしてとうとう、自ら溝で首をくくつて死んでしまつた。

日本の僧舞首座は、私のためにこのことを語ってくれた。私は、俘虜として生きて帰つたが、この世において棄てられた。私もまた、世の中とともにお互いを忘れ去つた。時がたつて、かつてこの身が忝<sup>かたじけな</sup>くも官吏に任命されていたことすら、覚えていない。

親しいある者が、そのことを私に勧めるがあつた。「君が、榮進に意を絶つているのは、譬えるなら宦官が房室に意を絶つたようではないか。なぜ榮進をまた求めて、それでもつて廃棄の恥を酒<sup>すず</sup>ごとくしないのか。」と。私はそれに応<sup>こた</sup>へて言つた。「たとえそれを求めても、誰がすぐにそれを与えるだろうか。前の恥がいまだ酒<sup>すず</sup>がれていないのに、さらに後の恥を得ることをひそかに恐れる。これは、乙なにがしが一つの瘤を取ろうとして

二つの瘤を得たことと、何が異なるであろうか。」と。  
勧めていた者は、大きいため息をつけて立ち去った。

### 三、「瘤戒」が伝えてくれること

さて、この「瘤戒」は何を伝えてくれるであろうか。そこから何を読み取ることができるだろうか。以下において、特に重要と考える着眼点を設定し、詳しく見ていきたい。

#### (1) 日東僧舜首座・藤原惺窩の「談」

まずこの「瘤戒」は、誰が、誰に対して、はなしたのかが明白に示されている。すなわち、「話者」(語り手)と「聞き手」(享受者)が明らかなのである。

原文の二重付線に「日東僧舜首座」とあることから、話者は、「日東」すなわち日本の、「舜首座」すなわち藤原惺窩となる。そして聞き手は、朝鮮の儒者睡隱姜沆であり、日本と朝鮮という二つの国の人物、しかも、儒者の間での説話(昔話)享受を伝えているこのような資料は、きわめて稀であり、貴重な文献と評価できる。

次に重要なのは、原文の二重付線「談」という表現である。「談」という語には、口頭による生きた語りが感じられ、またうちとけた場の雰囲気も感じさせる。姜沆が「談」の字を用いたのは、その場が、口頭で行われた、生きた語りの場であった

ことを示している。

では、それは一体いつのことであろうか。まず、惺窩と姜沆が出会い親密な関係にあった時期が、いつからいつまでかという問題がある。それに関して文献資料類を見ても、なかなかはっきりわからないので、姜沆が日本に居た時期をまず確認しておこう。

姜沆自身の記録「賊中封疏」によれば、伏見の地に抑留されたのは慶長三年(一五九八)の秋である。しかしすぐに惺窩と談話の場があったとは考えにくいので、早くとも慶長四年(一五九九)に入ってからと考えられる。そして慶長五年(一六〇〇)の二月に抑留から解き放たれて、四月二日に京を出発し、五月十九日に釜山に着いているので、出発前の三月頃までとしてよいであろう。したがって、可能なのは一年と三ヶ月ほどの期間となるであろう。そのいずれかの時に、談じる場があったと判断できる。

#### (2) 「瘤戒」の特質

では、「瘤戒」に記されたところの惺窩が語ったという「こぼとり」について、具体的に見ていきたいが、日本の文献資料である鎌倉時代初期の説話集『宇治拾遺物語』第三話「鬼二瘦被取事」(以下「宇治」と略す)や、同時代の教訓書である『五常内義抄』「智賢也 不妄語戒」の「第十四」(以下「五常」と略す)、そして中国の『産語』「臯賓第六」(以下「産語」と略す)などとの対比・対照もさしはさみながら、「瘤戒」の特質について

て考察していきたい。

江戸初期の安楽庵策伝『醒睡笑』に類話があるが、その成立年の元和九年（一六二三）は、姜沆の帰国後であり藤原惺窩の没後であるので、対象から外れる。

## 1. 対立的設定

「瘤戒」は、まず、前半と後半と呼べる部分からなっていて、話の構成そのものに対立性が見られる。

次に人物設定は、民間説話・昔話において重要な基本要素であり、その対立的な設定については、アンテイ・アールネなどの研究者がとくに指摘した民間説話の本質的かつ普遍的な特質である。

「瘤戒」では、前半と後半に登場する二人の人物も、対立的である。付線「某甲」と「某乙」とあって、甲・乙という対立的な呼び名になっている。しかし、甲・乙の人物については、単に瘤があることを説明するだけであり、たとえば「やさしい」に対して「いじわるな」や、「正直な」に対して「嘘つき」などといった、人物を対立的に修飾する形容句は付いていない。簡潔である。

ところが、日本の資料『宇治』では「翁」、『五常』では「法師」とあって、前半・後半とも、同じ登場人物の名称になっている。また中国の『産語』では、単に「人」とのみあって、いずれにおいても名称に対立性は認められない。

対立的な設定は、それら人物たちの「行動」において表されている。同じ名称であるほうが、その「行動」の対立性をむしろ際立たせているといえそうである。

## 2. 「隣の爺」型

右の1で取りあげた対立的設定の構成、いわゆる後半のはなしは、「瘤戒」では、二重付線の

隣里

という語から始まっている。すなわち、後半の話が対立的な「隣」に設定されているのである。

「隣の爺」型が、日本の昔話において顕著に見いだせる重要な特徴であることは、すでに先行研究において指摘され論じられている。一大特質であるがゆえに、たとえば関敬吾著『日本昔話大成』では、分類項目に「隣の爺」が設けられているほどである。

藤原惺窩が談じた話は、この「隣の爺」型であった。

では、『宇治』と『五常』ではどうかを見ると、

隣にある翁、左の顔に大なるこぶありけるが、（『宇治』）

又隣こぶ以たる法師（『五常』）

とあって、やはり「隣」の設定が明白である。

しかし、中国の『産語』を見ると、

里人有患瘤于頸（里人がおり、頸に瘤があった。）<sup>(18)</sup>

とあって、「隣」の設定にはなっていない。中国資料の「こぶと

り」は資料紹介（特に口承採録話の日本語訳）が少なく論議が難しいが、『産語』が隣の爺型ではないことがわかった。

### 3. 「鬼」

「瘤戒」では、山の中で登場するのは「鬼」である。鬼は、日本の「宇治」と、中国の「産語」と共通する。しかし『五常』では「天狗」であって、「鬼」ではない。日本の資料では、「鬼」と「天狗」の二種類が異界の存在として現れる。

姜沆が記した「瘤戒」には鬼とあるので、藤原惺窩が談じたのは「鬼」であったと見てよいだろう。「鬼」（漢文では「鬼神」という表記が圧倒的に多い）は、朝鮮の類話のほほすべてに登場している。もしそれが「天狗」であったとしても、聞き慣れ親しみのある「鬼」に理解され、換えられたのではないかと考えられよう。

### 4. 「3」の数の優位、繰り返し

付線の「鬼三問甲三諾」に注目したい。簡潔な漢文表現ではあるが、そこに「三回繰り返し」がはっきり認められるからである。明日の夜にもまた来るかと鬼は三度問い、甲も三度「諾」（承諾した）とあり、鬼と甲の間答のやりとりが「三」回あったとみる。

「3」の数を好むこと、「3」の数が優位であることは、世界の民間説話・昔話に広く認められている特徴である。とりわけ

口頭伝承において顕著なこの特質が、「瘤戒」に見られることから、藤原惺窩が談じた話は、口承の要素が強いものであったと判断してよいだろう。

### 5. 「質」、質を取る理由と質を返す理由

波線の「質」は、何かを保証するために預かるものをさす。この話では、その質が「瘤」であるところに話の核心、面白味がある。

「瘤戒」では、鬼が約束（信）の保証として、甲の瘤を「質」に取っている。そして後半では、乙に対し鬼は、約束を守ってよく来た喜び、「信」があると行って、預かった「質」の瘤は返すべきと言いながら瘤を乙にくっつけている。つまり約束を守った行為を「信」と評価して、「質」を返したことになる。

ところで、「信」は、「儒教に説く五常、即ち仁、義、礼、智、信」<sup>19</sup>にあり、儒教が重視する徳目、倫理である。これが、『五常』には左のように認められるのである。本文には、

約束不違來と云、質返さむと云て（『五常』）

とあって、約束を守りやって来たので「質」を返そうと言っている。本文に「信」という語そのものはないけれど、「約束を守ること」が「質」を返す理由である点は、「瘤戒」とまったく同じである。

この点で、藤原惺窩が談じた話は、『五常』と大きい共通性を見せているといえる。

しかし、『宇治』は、これらとは異なっている。本文には、

このたびは、わろく舞たり。<sup>(かへすがへす)</sup>返く／＼わろし。

とあって、悪く舞ったといい、悪く舞った理由で、鬼は瘤を返しているのである。廣田収氏は、この『宇治』の特徴について、『宇治』では「舞の良し悪しが要めである。」と指摘された。すなわち、舞の良し悪しが、瘤を返す理由になっていて、約束を守ったこと<sup>が</sup>が理由になっていないのである。

この点において、『瘤戒』は、『宇治』とは決定的に相違するといえよう。

以上のことから、藤原惺窩が姜沆に談じた「こぶとり」の話は、『宇治拾遺物語』よりも、『五常内義抄』の所載話に大きく親近するものと判断されるのである。

## 6. 話末評語

話末評語とは、「説話の末尾に、編者もしくは説話伝承者の短い批評・感想・教訓などが付加され」た文言をさす。

『五常内義抄』は、儒教に説く「五常」を、仏教に説く「五戒」に對比し説明した教訓書であるという。そこで、『五常』の本文を見ると、

不見處をば不信<sup>トセ</sup>云り。

とあって、見ないことを信じるな、と戒めている。「信」は、儒教が説くところの「五常」の一つである。しかし、仏教が説く「五戒」には「信」は入っていない。この点で、『五常内義抄』は、儒教をより重視した書と言える。

ところが、これに対して『宇治』では、戒めの内容が『五常』とはまったく違っているのである。

物うらやみは、すまじき事なりとぞ。

とあって、羨むこと<sup>を</sup>を戒めているからである。

この『宇治』と同じなのが、中国の「産語」であり、そこには

徒羨人之禍也(むやみに人を羨むと禍<sup>わざわい</sup>になる)<sup>(22)</sup>

とあって、「羨むこと」を戒めている。

ところで、『瘤戒』には、右の定義のような話末評語はない。あるのは、姜沆の長い述懐(原文の約四分の一)である。

この部分は、かつて藤原惺窩から聞いた「こぶとり」と関連づけて、帰国後の自身の置かれた状況についての思い・決意を述べた部分になっている。つまり、説話の「享受」を示す部分に該当する。

その思いとは、原文「前恥之末酒而窃恐更得後恥」の波線「前恥」と「後恥」のことである。

すなわち、倭軍の捕虜となったこと、そして俘虜として生還したことを、波線の「廃棄の恥」「前恥」と言い表し、宮廷に出仕して受けかねない恥を「後恥」と表現して、「恥」を二度も得る行為を、姜沆は戒めているのである。つまり官僚として出仕しない考え、栄進を求めない決意を述べたわけである。

実のところ、姜沆は、帰国後すぐ宣祖王よりその功を賞され、宣祖三六年(一六〇二)に大邱教授に任命されたものの、赴任

しなかった。翌宣祖三十七年（一六〇三）にも順天教授の任命があったが、やはり赴任していない。姜沆は、帰還以後、王の意志に反して彼を排斥する朝廷の臣下らによつて、故郷に戻つていたのである。そしてその後は、後進の教育と農耕にすべてをささげたのであった。

こう見てくると、睡隱姜沆の人生観は、儒教の四書の一つ『中庸』が説く「君子居易以俟命」にあった、という李慧淳氏の指摘は重要である。すなわち『中庸』のこの一節は、自分の節義を認めないで阻害しようとする相手に対して、怨んだり責めたりすることをせず、ただ自らを正していくことの重要性を、説いているからである。

「三綱五倫」を尊ぶ儒者姜沆にとつて、「恥」をかくことは、最も「戒」めるべきことであつた。姜沆が付けた「瘤戒」というタイトルの「戒」は、まさしくそれを表わしたものであつた。

以上において、「瘤戒」について、日本と朝鮮の二人の儒者にこだわり、口承という視点に重きを置いて、日本の「こぶとり」の代表的文献資料に依拠しそれとの対比も試みながら、その特徴・特質を明らかにしてきた。

## 7. 「呂宋」という設定について

「瘤戒」は、冒頭「呂宋。東海中小国也。」と語り出す。一般的には、「呂宋」はルソン島をさす。しかし額面通りに、呂宋という国の説話と受け止めるのは危険であろう。

藤原惺窩は、たしかに慶長元年（一五九六）年に、薩摩の大隅内之浦に行き、ルソン瑠璃盞を見、呂宋や琉球の話などを聞きまた世界地図を見たというが、<sup>25</sup>はたして呂宋の「こぶとり」にまで接したかは記録もなく不明で、その記録だけでは論議が推測におわろう。

それよりも、ことばの使用例にこだわったところ、鈴木棠三氏に、当時、呂宋（ルソン）という語は、「広い意味の南方海外の称」として使われたものという指摘があつた。<sup>26</sup>とすると、「瘤戒」の「呂宋」は、日本ではない国ほどの意味と理解するのが妥当ではないかと判じられるのである。

筆者は、語りだしの「呂宋」は、「日本のはなし」として姜沆に語るのを藤原惺窩がはばかつて避け、仮託して用いた設定ではなかつたかと考えている。

なぜなら、聞き手の姜沆は、日本の侵攻によつて家族を失い、抑留軟禁という状況に置かれていたからである。そのような姜沆への心遣いがあつて、「日本のはなし」として語ることを避けたのではないかと、筆者は判断するものである。

## 注

(1) 朴鐘鳴訳注『看羊録』一九八四 平凡社 一二頁、二二頁、二二頁

(2) 今中寛司『近世日本政治思想の成立―惺窩学と羅山学』一九七二 創文社 一五四頁

- (3) 石田一良・金谷治校注『日本思想大系28藤原惺窩 林羅山』一九七五 岩波書店 三六五頁
- (4) 阿部吉雄『日本朱子学と朝鮮』一九六五 東京大学出版会 八三頁
- (5) 金谷治『藤原惺窩の儒学思想』四四九頁(注(3)の書)
- (6) 注(2)の二三頁
- (7) 注(3)に同じ
- (8) 疋田啓佑『儒者―日本人を啓蒙した知の巨人たち』二〇二三 到知出版社、一五頁
- (9) たとえば司馬遼太郎氏『この国のかたち五』には、書名誤解からの評価(姜沆は、蘇武に自分をなぞらえている。)が見られる。
- (10) 注(1)の二九三頁
- (11) 松田甲『日鮮史話 四』一九七六 原書房 三九〇頁(原著は一九三二年。引用原文に脱字誤字があり注意を要する)
- (12) 注(4)の六六頁
- (13) 『東アジア笑話比較研究』二〇二二 勉誠出版
- (14) 注(1)の一八五―一八六頁
- (15) 三木紀人他校注『新日本古典文学大系42宇治拾遺物語 古本説話集』一九九〇 岩波書店
- (16) 鷲尾順敬編『国文東方仏教叢書 第二集 第三卷』一九三〇 名著普及会
- (17) 神谷正明『産語の研究 校注篇第一冊』一九六二 書籍文物流通会
- (18) 廣田収『宇治拾遺物語』の中の昔話』二〇〇三 新典社 三八頁
- (19) 注(16)の「解題」二頁
- (20) 廣田収『宇治拾遺物語』表現の研究』二〇〇三 笠間書店 二二八頁
- (21) 西尾光一『中世説話文学論』一九六三 塙書房 一六四頁
- (22) 注(18)の三九頁
- (23) 李慧淳『睡隠姜沆の詩的思惟とその意味』『韓国漢文学研究』第二七輯 二〇〇一 一九六頁
- (24) 注(23)の二二頁
- (25) 太田青丘『藤原惺窩』一九六五 吉川弘文館 四三頁
- (26) 鈴木棠三校注『醒睡笑』一九六一 岩波文庫 一一〇頁
- 韓国における姜沆の「文学」に関する論考(日本語訳して示す)  
キム・ドンジュン「睡隠姜沆の生涯と詩」『韓国漢詩作家研究』第8輯、二〇〇三
- パク・セイン「睡隠姜沆の詩文学研究」全南大学校博士学位論文、二〇〇九
- キム・ギョンオク「睡隠姜沆の生涯と著述活動」『島嶼文化』第35輯、二〇一〇・六
- パク・セイン「睡隠姜沆と一七世紀初の湖南文学の一面」同右誌
- パク・セイン「睡隠姜沆の連作形題詠詩考察」『ソムジン江圈歴史文化地図』ブルンギル、二〇一三
- (びょん・うんじょん/同志社大)